

# 遊美

- 1 山田 一二さんの作品と  
作品についての言葉
- 2-3 美術鑑賞旅行
- 4 作家探訪 橋本 弘幸先生
- 5 美に遊ぶ
- 6 企画展報告  
お知らせ  
あとがき



## 山田 一二 「悠久のカップパドキア」

2016年／油彩・カンヴァス／F80号／2016年茨城県展

1994年初回だったか、友の会海外美術鑑賞旅行中世界でどこが最も面白かったかという話が出た。当時事務局長だった箕先生が「カップパドキア」と言われたことが忘れられない。地名だけは耳にしたことがあった。

それから約20年後の2015年4月、ついにそのカップパドキアを訪れる時が来た。トロイ遺跡に近いチャナッカレの国立大学に、1993年日本語学科が設立された。友人が学科長として赴任し、学科立ち上げ業務から日本語教育に尽力し、20余年勤め、退任した年のことである。退官記念にと、一緒に約半月のトルコ国内旅行をした。

ヒッタイトのハットゥシャからローマ、オスマントルコ時代、そして現代トルコを巡る旅は終始刺激的だった。何よりも「カップパドキア」は、地球的時間を感じる最高の3次元カンヴァスだった。

翌2016年、その感動をカンヴァスに必死に描き、そっと私たち3人も描き入れた。その作品が、県展で美術館に展示された。今も私のPCの待ち受け画面にしている。

今年、友の会の旅行で3度目のトルコを訪れた。駆け足の旅にもかかわらず、やはり魅力的だった。

(日立市在住)

2024年3月11日～18日の8日間、参加者30名はエフェソス、パムッカレ、コンヤ、カッパドキア、アンカラ、イスタンブールの世界遺産や美術館を巡りました。コロナで、海外美術鑑賞旅行を2020年度から休止していたため、4年振りでした。

## 歴史を辿るトルコ旅行

徳永 美佳



文明の発祥の地のひとつであるトルコ。いつかは訪ねてみたいと切望していた国であり、世界遺産を巡る8日間(3月11日～18日)は素晴らしい感動の連続でした。

成田を出てイスタンブールに到着、そのまま国内線に乗り換えてのイズミール泊。外国にきた実感も薄いまま早朝にエフェソスへと向かいましたが、バスの車窓から見える風景は、至る所に遺跡が点在し、それが「普通の」景色であることに衝撃を受けました。ガイドの方が歴史・文化・宗教・料理に至るまで広く深い知識を有していたため、移動の間に有意義な説明(講義?)を受けつつ、より深まった理解とともに巡る遺跡群。紀元前11世紀頃から海上貿易の要として発展してきたエフェソスの古代都市を歩き、人類最古の壁画からアルテミス像まで、この遺跡から発掘された珠玉の出土品が並ぶエフェソス考古学博物館を見学。そのままパムッカレにあるヒエラポリスと純白の石灰棚へ。初夏のような陽気の中、咲き誇る野の花の中に時空を超えて存在する遺跡や、淡いブルーの水をたたえた石灰棚が広がる景色は、心に残る美しい風景でした。

旅行中はバスでの移動距離が長く、車窓からの眺めを楽しみ、博識なガイドの方の説明をゆっくり咀嚼する時間的余裕にも恵まれました。コンヤではカタライ神学校を眺め、メヴラーナ博物館にて壮麗な室内装飾や華麗なターキッシュブルーの尖塔などを見学。スルハンのキャラバンサライでシルクロード商隊貿易の歴史に触れ、数百年前に織られた美しい絨毯を拝見することができました。カッパドキアでの気球体験は、残念ながら風に阻まれ中止となってしまいましたが、会場に向かうバスの車内は、気球体験への期待から大きく盛り上がり、想定外に楽しい時間となったうえ、翌朝には幾多もの気球が美しく空を彩る風景も見ること

ことができました。世界遺産カッパドキアは、期待に違わず素晴らしく、奇岩群に作られた地下都市や美しい彩色のフレスコ画が残る岩窟教会など、これぞカッパドキア!という景色を満喫しました。

訪問中トルコは雨期にあたる時期でしたが、ほぼ全日晴天に恵まれ、おりしも花の季節と重なって、満開の桃の木やアーモンドの美しい花が目を楽しませてくれました。また、世界三大料理といわれるトルコ料理は私の口にとっても合い、日本食が恋しくなることもなく、地元産のビールやワインと共に大いに食事を堪能しました。

何より、素晴らしい同行者に恵まれたことが今回の旅行を最高のものとしてくれました。8日間、ずっと笑っぱなしで過ごすことができ、ご一緒くださった皆様には感謝しかありません。素晴らしい時間をありがとうございました。

(水戸市在住)



エフェソス ケルス図書館を背に集合写真



アルテミス像  
エフェソス考古学博物館蔵



パムッカレ石灰棚

首都アンカラを経てイスタンブールへ  
上野 陽子



日本を出発して5日目、旅は後半に入りカッパドキアからアンカラ空港へ向かった。途中、アタテュルク廟の近くを通る。トルコ建国の父と謳われる「ケマル・アタテュルク」は政教分離を憲法に明記し、トルコを近代化に導いたという人物だ。

アタテュルク廟を通りすぎて向かったのはアナトリア文明博物館である。この博物館は遺物が展示された悠久の歴史を学べるところである。博物館を後にし、アンカラ空港からイスタンブールへ到着。バスの車窓から見える城塞は静かに歴史を語っているようだ。移動したレストランで3月生まれの4人に記念品の贈呈があり、3月生まれの私は心遣いに感謝。

6日目はイスタンブールの終日徒歩観光だ。スカーフを被りイスラム寺院ブルーモスクへ。外部は通常より2本多い6本の尖塔(ミナレ)が建ち壮大である。内部は優雅華麗で、タイル画とステンドグラスの半円型天井が連なり天空の星を見ているようで、つい声が漏れる。

驚嘆の余韻を抱えながらトプカプ宮殿ハレムへ移動。宝物館の宝石・黄金等々すべてにオスマン帝国の歴史が感じられる。次に見学したアヤソフィア聖堂はギリシャ正教の教会として建設された後に、イスラム教のモスクに手直しされ、所々にその痕跡が見られる。

レストランでの食事の後、ペラ美術館に向かう。この美術館の一番の見どころは、なんとといってもオスマン・ハムディ・ベイの「亀の調教師」。調教師の赤の衣装が印象的だ。

イスタンブール考古学博物館の石棺彫刻は圧巻だ。グランバザールは土産品購入に便利だが広くて道に迷い、一日の歩数は2万歩を超えた。

7日目、ボスポラス海峡クルーズはイスタンブール市街地を海から臨むことができ、アジアとヨーロッパを同時に見られる海峡である。クルーズ船からも見えたイスタンブール



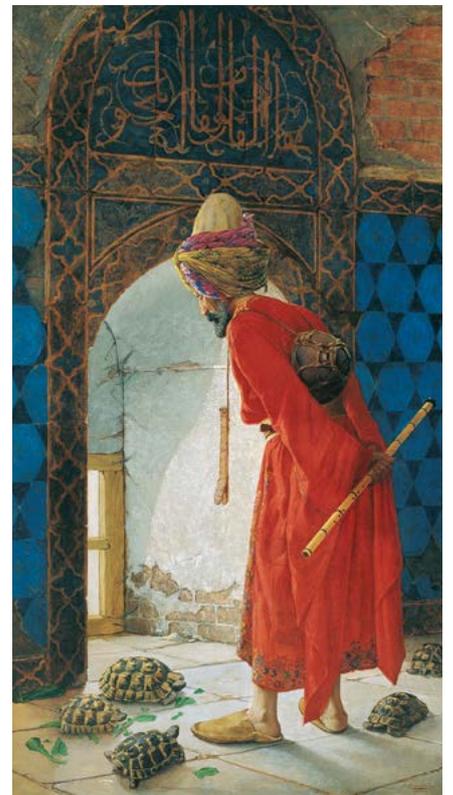
ブルーモスクを遠く背にして全員写真(最後列左から2人目ガイドのオキアイ(Okyay)さん、最前列右端添乗員の横山さん)

ル近代美術館は、海のすぐ横にある近現代アートの展示館だ。

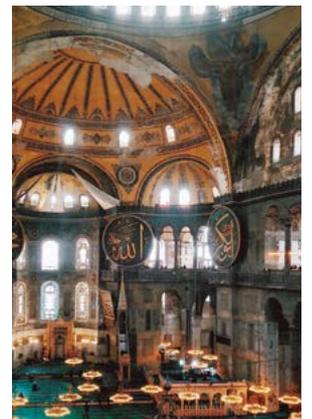
トルコでの最後の食事は海鮮物。世界三大料理のひとつと数えられる、おいしいトルコ料理を堪能した。

レストランからイスタンブール空港へ移動し日本への帰路に着く。短い日程ではあったが、トルコ内のバス移動は2500kmを超えた。

年齢中央値が「33歳」と若いトルコが重層な歴史と共存しながらどんな未来を創るのか楽しみである。帰路に着きながら再訪を思う旅でもあった。(水戸市在住)



オスマン・ハムディ・ベイ「亀の調教師」  
1906年/油彩・カンヴァス  
221.5×120cm/ペラ美術館蔵  
<https://www.peramuseum.org/artwork/the-tortoise-trainer/15/92> から取得



ビザンツ建築の最高傑作とも評されるアヤソフィア内部

探訪



## 洋画家 橋本 弘幸先生を訪ねて

### いのち 生を咲かせる

橋本先生のお宅は、那珂市の国道118号線からほど近いところにある。美しい春の花木をあちらこちらに眺めながらお宅を訪ねた。先生は奥様と、素敵な笑顔で迎えてくださった。

先生は小さいときから絵を描くのがお好きで、中学で美術の関谷絏一先生の影響を受け、高校では美術部、その後茨城大学の美術科に進まれた。大学では西田亨先生に教えを受けた。卒業後は小学校、中学校で美術教師を続けてきた。「仕事優先でしたから」と謙遜なさるが、お忙しい中でも光風会、日展などへ出品を続けられてきた。

### ガラス器 静物画の頃

ガラス器などの静物を描くことが多かった橋本先生にジョルジョ・モランディ(イタリアの画家1890~1964)を観なさいと勧めてくれたのは西田亨先生だと。若い頃、東京の書店に出かけて高価な画集を無理して購入したと笑う。ガラス器を中心に描いていた頃の作品は「明暗や陰影をおさえた淡い調子での存在感と空間」そんなものを目指して描いていたとおっしゃる。日展初入選は2000年「ガラスの器のある静物」。いつまでも見ていたい不思議さを秘めた世界である。

天心記念美術館で徳岡神泉の日本画に出会ったことを話してくださった。深みのある幽玄な世界に魅了され、

奈良の美術館まで神泉作品を観にいったそうだ。そのころ空間処理に悩み、迷いの中にあつたという先生は、一筋の光を探していたのだろう。



「ガラス器のある静物」  
2000年/油彩・カンヴァス  
F100号/第32回日展

### フェルメールとの出会い

「牛乳を注ぐ女」のポスターがアトリエの壁にあった。先生は2007年東京の展覧会で出会ったこの作品に衝撃を受けたそうだ。一瞬を切り取って永遠にする写実。初心に戻って、物をしっかり描こうと思われたという。先生50歳過ぎのことである。それからは、モチーフを少しずつ変えながら、形や質感を丁寧に描き込んで存在感を出すように努めていたそうだ。花を描くようになったきっかけは、ご自身が体調を崩されたことや、身近な人との別れで、改めて命の大切さと儚さを感じたことだという。テーマを「生」とし、花に託し美しさや無常観を表現したいとおっしゃる。

### 花を育てる

題材としての山百合を手にする苦勞を話してくださった。友人の導きで採取した山百合は、次の年には殆どなくなってしまっていたそうだ。イノシシの食害らしい。今は山百合を庭で育てているという。庭には先生の画面に登場する植物が他にも、ひまわりやケイトウなど数知

れず。写生をしていると、花は時間と共に姿を変え生の営みを感じさせてくれるという。自ら育ててきた花だからこそ感動が生まれる。

### 古い物と土地の絆

作品の背景で、揺るぎない空間構成の一部になっている古い板は、物置にあつた着物の洗い張りに使っていたものだという。背景にちょうどいいように加工するのはDIYのお好きな先生の得意分野。アトリエのテーブルや椅子、照明装置も先生製作と聞いて驚いた。傍には、氏子総代をしている神社の木を加工した板が。お祭りで配る物ができないかと思案中という。楽しそうな先生の顔が覗いた。

### インタビューを終えて

先生は、作品の変遷を私たちにもわかるようにご自分の言葉で語ってくださった。豊かな世界をお持ちの先生が、新たな境地を見せてくださるのが、今から楽しみである。

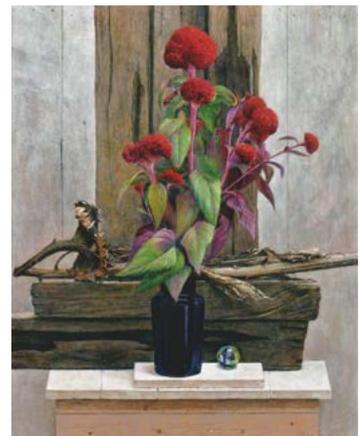
(会報委員会)



「台秤のある静物」  
2011年/油彩・カンヴァス/F100号/第43回日展



「生」  
2022年/油彩・カンヴァス  
F100号/第9回日展特選



「生」  
2023年/油彩・カンヴァス  
F100号/第10回日展

はしもと ひろゆき  
橋本 弘幸

rd. Hashimoto

- |                                       |                        |                    |
|---------------------------------------|------------------------|--------------------|
| 1953 茨城県那珂市(旧瓜連町)に生まれる                | 2019 茨城の美術セレクション展      | 2023 茨城の美術セレクション展  |
| 1972 茨城県芸術祭美術展覧会初入選(1978年優賞、1984年会友賞) | 2021 第107回光風会 会員賞      | 2024 第13回現代茨城作家美術展 |
| 1976 茨城大学教育学部美術科卒業 第61回光風会展初入選        | 茨城の美術セレクション展           | 現在 日展会友、光風会正会員     |
| 2000 第32回日展初入選(13回入選)                 | 2022 第108回光風会展 田村一男記念賞 | 茨城県芸術祭美術展覧会会員      |
| 2018 第104回光風会展 会員賞                    | 第12回現代茨城作家美術展          | 住所 那珂市             |
| 茨城県芸術祭美術展覧会 審査員                       | 第9回日展 特選               |                    |

## 他山の空似

五嶋 英門

(茨城県近代美術館ミュージアムショップ経営 美術作家)



※ これは2019年に開催した個展「他山の空似」に寄せたテキストを一部改変したものです。

誰でも、自分が日々淡々とこなしていることにそれほど意味があるとは思えないものだ。自分の身の周りにある何でもない物事に、例えば50年後、100年後にどんな意味があるかなどと考えることは滅多にない。実際、そのほとんど全ては忘れられたことすら忘れられるだろう。

水戸藩の重臣、会沢正志斎が総裁を務めた彰考館には大日本史の資料が大量に保管されていたが、それは1945年8月2日、アメリカ空軍の爆撃により焼失した。しかし今現在、その事実を憂える人間がいるとしたらそれは一部の専門家、好事家だけであり、市井の私たちには何の関係もないと考えても全く不自然ではない。そんな私たちにとって何かを残すことにどれほどの意味があるというのだろうか。「残す」というよりは、むしろ何か「残ってしまう」という方がふさわしく思える。水戸のキワマリ荘そのものにしてもそうだ。20年後、30年後、あるいはもっと後に、誰か憶えている人がいるだろうか。

ところで、植物はガス状の物質を放出して情報を交換し、ウイルスは生物の形質変容に関わっていて、細菌の会話はアミノ酸の交換によって為されるという。もしかすると、私たちが使う「言葉」は、「言語現象」の内に含まれるごく僅かな部分でしかないのかもしれない、と言ったらオカルトめいた妄想だと笑われるだろうか？

「白亜紀」と呼ばれる、遙か昔のある期間を表す言葉がある。その

名に伴って浮かび上がる曖昧なイメージは、本の挿絵か、化石の写真か、あるいは漫画か映画などに由来している。考古学者でないならそれが正しいかどうかには構う必要はない。もしそういう「意味」が、例えば隣の海岸に無数に転がっているなら、例えそれが「国土」であろうと、動かすことが違法であろうと、好きなように読み出していい。多くの文化で、人は石に不変の願いを託しているが、巨視的に見れば石も岩も山々も絶えず動き続けている。誰でも知っているありきたりな事だが、それは私たちがそのような知識を植えつけられ、また自ら植え付けてきたからであり、それがありきたりでない場所もある、ということも私たちは知っている。

私たちは必要に応じて赴くままに、神さま、確率、偶然や必然等々を持ち出すことをして、旺盛にそれぞれの世界に折り合いをつける。それでも、私たちはいつでも、まだ何か欠けている、と感じ続ける。言葉には、その語と語順が表す意味以前の次元に力と方向がある。それは私たちには捉えきれない、この場を動かしている何かを示すしるしだ。その何かはおそらく、私が先に述べてきた

憂いや虚しさ、諦めや皮肉など無慈悲にも軽く超えてしまうだろう。意味は絶え間なく回転し、反転し、際限なく大きくなったり小さくなったり、くっついたり離れたりして、その連鎖と相互作用が私たちの姿形を作る。私たちを掴んで離さない「未来までもを治めようとする力」に立ち会うには、どんな方法があるだろうか。

(水戸市在住)



1945年8月2日アメリカ空軍による水戸市空爆の記録写真



ひたちなか市平磯白亜紀層

## <企画展報告>

英国キュー王立植物園

2024年2月23日～4月14日

おいしいボタニカル・アート 食を彩る植物のものがたり

英国は長年にわたり世界中の植物を採集し、カメラの無い時代にそれらを緻密に観察し描くことで記録してきた。正確さを極めた描写は、それらの植物の科学的記録にとどまらない。形状や色彩質感などの描写は、個々の植物が存在し種を残していくための理屈を明確に伝えている。それが美しい。とくに、ウィリアム・フッカー（1779-1832）による果実を描いた一連の作品は、画面からこぼれ落ちそうな重力と香りまで感じ取れた。

今回はさらに英国の植物と食にまつわる歴史と文化が展示された。紅茶以前にブームとなったコーヒー・ハウス、そして貴族階級から始まったアフタヌーンティー文化。さらに、ビールやウイスキー、ワインやシードルにまつわる器やグラス、カトラリーなどが並ぶ。18世紀19世紀王朝時代の優雅なテーブル・セッティングやティー・セッティングも再現された。また、今回の展示の壁紙にピンクやブルーのカラフルな色調が多く採用され春らしい雰囲気満載であった。最後には料理レシピ再現の映像が流れ、まさに「おいしいボタニカル・アート」おなかいっぱい、ご馳走さまでした。一部撮影可能なコーナーもあり、ミュージアムショップも書籍やグッズが充実。また、期間中に講演会やワークショップ、コンサートなど関連イベントも企画され、女性の観覧者が多くみられた。



企画展で使用されたパネル

(会報委員会)



ウィリアム・フッカーの果物画に見入る来場者  
([おいしいボタニカル・アート]会場風景)



ヴィクトリア朝のダイニングテーブルセッティングの再現  
([おいしいボタニカル・アート]会場風景)

## <お知らせ>

4月に茨城県近代美術館で職員の異動があり、新しく館長に荒屋鋪<sup>あらやしき</sup>透氏、美術課長に井野 功一氏が就任されました。新館長のご挨拶は、次(第107)号に掲載する予定です。

### あどがき

- コロナの声も少なくなり、平穏な毎日が戻ってきた矢先、年始めの能登半島地震、4月の豊後水道地震と自然の猛威に見舞われました。友の会活動は通常に戻り、待ちに待ったトルコ海外美術鑑賞旅行、東京への美術鑑賞旅行も無事終えることができました。
- 5月11日、2024年度の友の会の理事会、議員会が開かれ、今年度

- の事業計画が承認されました。また、奥村会報委員長が副会長に就任しました。
- 「游美」106号へ、お忙しい中原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。これからも「游美」へのご協力をよろしくお願い申し上げます。
- 「英国キュー王立植物園 おいしいボタニカル・アート 食を彩る植物のものがたり」の画像を澤渡

首席学芸員からいただきました。お礼申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報

游美 No.106

発行 2024(令和6)年6月  
編集・発行 茨城県近代美術館友の会  
〒310-0851  
水戸市千波町東久保 666-1  
TEL.029-243-5111  
E-mail : f.momaibk@gmail.com  
HP : https://fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷